

平成28年（2016年）当院における病理解剖の現状

岡本 清尚¹⁾ 中村 淳博¹⁾ 舟橋 信司¹⁾ 平塚 友香莉¹⁾ 道下 博史¹⁾ 棚橋 忍²⁾

1) 高山赤十字病院 検査部 病理診断科

2) 高山赤十字病院 内科

抄 録：平成28年1月より12月における、当院の総死亡者数は408名であり（CPA: Cardio-pulmonary arrest：心肺停止状態等による死体検案症例を含む、死産を除く）、そのうち病理解剖となった症例は死亡診断書症例のみ3例であった。剖検率は死亡診断書症例で1.31%、死体検案症例に関しては0%であった。

各科別の全死亡数、死体検案数、剖検数、剖検率の内訳を（表1）に示す。月別剖検数を（表2）に示す。今年の症例は内科で死亡診断書症例3例、死体検案書症例0例であった。

以下、平成28年の3剖検例の解剖結果について報告する（表3）。なお記載は、日本病理輯報の記載要項に準じた。

（表1）2016年（平成28年）各科別 死亡数、剖検数、剖検率

科	死亡診断書数（死体検案書数）（例）	剖検数（死体検案例数）（例）	総剖検率（死体検案例剖検率）（%）
内科	229(24)	3(0)	1.31(0)
循環器内科	55(3)	0(0)	0(0)
外科	36(6)	0(0)	0(0)
脳外科	55(6)	0(0)	0(0)
整形外科	7(1)	0(0)	0(0)
産婦人科	2(0)	0(0)	0(0)
小児科	5(0)	0(0)	0(0)
眼科	0(0)	0(0)	0(0)
耳鼻科	8(2)	0(0)	0(0)
泌尿器科	11(1)	0(0)	0(0)
口腔外科	0(0)	0(0)	0(0)
放射線科	0(0)	0(0)	0(0)
皮膚科	0(0)	0(0)	0(0)
心療内科	0(0)	0(0)	0(0)
合計	408(43)	3(0)	0.73(0)

当院、2016年（平成28年）、当院死亡診断書・死体検案書による。

(表 2) 2016 年（平成 28 年）月別 剖検数

月	剖検数（例）
1	1
2	0
3	0
4	2
5	0
6	0
7	0
8	0
9	0
10	0
11	0
12	0
計	3

当院、2016 年（平成 28 年）、死亡診断書・死体検案書による

(表 3) 2016 年（平成 28 年）剖検結果

剖検番号	年齢・性	臨床診断 (出所、依頼科)	主剖検診断（太字）、 副病変 1.2.3....
1083	88 才・女	汎発性腹膜炎術後 菌血症離脱後 直腸皮膚瘻 (内)	○敗血症 (1: 気管支肺炎+肺硝子膜症+間質性肺炎 2: 左腎膿瘍+腎梗塞)。 1: 亜急性心筋梗塞 2: ダグラス窩膿瘍 3: 脂肪肝 4: 左副腎腺腫 5: 腎乳頭腺腫 他。
1084	75 才・男	悪性リンパ腫 化学療法直後 (内)	○悪性リンパ腫 (B 細胞、マントル細胞)、転あり。1: DIC 2: 腹水 (2,500ml) 3: 肝硬変 (アルコール) 4: 両側腎うっ血 他。
1085	85 才・男	肺炎 深在性真菌症 (内)	多発性骨髄腫、転なし。○1: 肺膿瘍 2: アスペルギルス症 3: 間質性肺炎 4: 肝うっ血+肝微小膿瘍 5: 両側胸水+腹水 他。

規約上、小さい病変でも癌（悪性腫瘍）が、主剖検診断となります。○は直接死因と考えられる病変。転：腫瘍の転移の有無。

【まとめ】

平成28年 1 月より12月における、当院の総死亡者数は408名であり（CPA: Cardio-pulmonary arrest：心肺停止状態等による死体検案症例43名を含む、死産を除く）、そのうち病理解剖となった症例は3剖検であった。今回、死体検案症例の解剖は含まれていない。剖検率は死亡診断書症例で1.31%であった。

【病理解剖について思うこと】

当院の病理解剖数は2015年 9 例に比して、2016年は3例であった。全国の医療施設での病理解剖が1990 年を境目として年々減少していることについては、文献（1）に記されているように「高齢化による死亡者数増加・患者と医師との関係の変化・医師の業務量の増加による熱意の低下」が関係しているのではないかと推測される。解剖によって初めて明らかになることは多く、たとえ画像診断が発達しても病理解剖

の重要性が無くなったわけではないので、日ごろより真摯な対応が必要である。

わが国において、病理解剖や日常の病理診断を担う病理専門医は、充足しているとは言いがたい現状で、文献(2)によれば、平成30年の病理専門医数は2,483人(男性1,903人、女性580人)とされ、その中でも65才以上が21.9%と高齢化傾向にある。ちなみに岐阜県は33人(男性26人、女性7人)、平均年齢55.9才と決して楽観できる状況ではない。地域全体として有効な人材活用が望まれる。

そんな中、当院においても前期研修の間に病理に顔を出してくれる医師が増えたことと、研修を終えた女性医師1名が病理専門医を目指して某大学で後期研修をすることになったことは明るい話題である。

最後に剖検に御遺体を提供されました御霊と御遺族に畏敬の念を表し、御冥福をお祈りいたします。

【文献】

- (1) 深山 正久、現在の問題点、病理解剖の現状、病理と臨床 2016, Vol.34:1146-1149
- (2) 佐々木 毅、表で見る病理専門医最新情報、病理と臨床 2018, Vol.36:1126-1131